

ライフ
ストーリー

金愛

(きむ・あい／サラン)

わたしがわたしであるために

「アライのライフストーリー集に寄稿してほしい」と依頼を受け、しばらく返事ができずにいた。この依頼がきっかけで、自分が「アライ」という言葉や、「アライ」と名乗る人に“信じきれなさ”を抱いていることを改めて自覚した。そう呼ばれること自体にも、ためらいがあると気づいた。「アライとは？」と検索すると、最初に「性的マイノリティを理解し、支援・支持する人のこと」と出てくる。それを見て、私の疑問はあっという間に強くなった。「理解」も「支援・支持」も一方的で「上から目線」な気がしてしっくりこない。この引っかかりは何だろう。そもそも、反差別運動の歴史にルーツがある「アライ」と、私が違和感を持つ「アライ」は似て非なるものであるような気がする…。言葉にならず曖昧なままにしていた疑問を、私なりにきちんと見つめ、言語化してみようと思い、結果的に寄稿することにした。

○“他人事”としていたレインボーウィーク

関学レインボーウィーク。期間中、キャンパスがレインボーにあふれ、さまざまな企画が行われる。レインボーはLGBTQ+のシンボルであり、多様性を尊重することの意思表示であり、「わたしがわたしらしく」あることを肯定し、「あなたがあなたらしく」あることを尊重する——そのように生きることを自分と約束するものだと捉えている。だからこそ私にとってレインボーウィークは、出身校であり職場でもある関西学院の中で最も大切にしたいイベントの一つである。

そう言いながら、数年前までの私にとってレインボーウィークは“他人事”だった。「多様性は大事だし、最近よく聞くLGBTの人たちのことを理解したいし、おしゃれで楽しそう」と思いながらも、“自分には関係のないこと”だと無関心だった。女性と自認し、シスジェンダーでヘテロセクシュアルだと、自問することさえなく信じてきた（当時はそんな言葉さえ知らなかった）私にとって、「LGBTの人たち」は自分とは明らかに違う存在で、それぞれが自分の好きに生きていたらそれでいいのではないかと思っていた。「アライ」についても、大まかな意味は認識しており横文字でかっこいいなと思ったものの、自分とは遠い存在に感じていた。

○家族の秘密、消された記憶

そんな私には、ある大きな“秘密”があった。

私は、父が在日朝鮮人、母が日本人というダブルルーツ、いわゆる「ハーフ」として生まれた。父は、在日朝鮮人であることで受けてきた差別から逃れるため、結婚を機に日本籍に『帰化』し、子の私が差別を受けないよう「日本人」として育てた。自分のルーツを初めて知らされたのは中学2年生のとき。「日本籍で生まれ、日本人として育ててきた。だが、就職や結婚の際に出自が明らかになると、差別を受けるおそれがあるから、今のうちに伝えておく。父の仕事や家族の生活に支障をきたすおそれもあるから、隠して生きていくように」と。父の“告白”を受けて、私は大きなショックを受けた。自分に半分“朝鮮の血”が流れていることを知り、自分の出自を卑しく思ったのだ。私は小学生の頃から、身近に在日朝鮮人がいた。「何人であろうと関係ない。いじめや差別をしてはいけない」——そう信じていた。しかし、いざ自分も朝鮮のルーツがあると知ったとき、その事実を“おぞましい”と思ってしまった自分に深く傷ついた。自分自身も差別をしていたのだと、差別を内包する弱い自分をとても醜く感じた。その時は2002年。拉致問題が連日報道され、社会全体が「朝鮮」への恐怖や敵意に大きく傾いていた。ネットは朝鮮へのヘイトであふれ、私は怖くなり自分のルーツを隠していくことを固く誓った。もう一生、「普通の幸せ」を味わうことはできないと悟ったことを昨日のこのように覚えている。その後20年以上、私は出自の“秘密”を隠して生きてきた。現在も続く在日朝鮮人をはじめとした在日外国人への差別から、自分をできる限り遠ざけて生きてきた。ルーツを隠し、日本と朝鮮半島の関係や在日朝鮮人をとりまく問題に無関心を装っている限り、私は「普通の日本人」でいられた。普通に学校生活を楽しみ、普通に友人たちと交流し、普通に恋愛をし、普通に生活できていると信じていた。

しかし、書店に「嫌韓本」が平積みされたとき、日本の首都の都知事が「第三国人」と発言し「犯罪者予備軍」であるとした存在がまさに父のことであると知ったとき、友人の口から何のためらいもなく嬉々として韓国・朝鮮へのヘイトが発せられるとき、好きな人と付き合う際に恐る恐る自身

のルーツを伝えると「親は気にするかもしれないけど、自分は何人でも関係ないよ」と言われ安堵する自分に出会ったとき、私は私の最大の“秘密”がいつか広く友人や世間にバレる日のことを想像し、震えていた。「普通」を装いながら私の心からは血が流れ続けていた。痛みの感度を最大限に下げて、愛想笑いをすることが自分にできる精一杯だった。この出自と、差別する心を持つ醜い自分がこのような目に合うのは仕方がない。そう納得させながら生きるしかなかった。

○痛みと無関心に向き合うまで

関西学院大学社会学部を卒業し、そのまま職員として働き始め、30代を過ぎたあたりから少しずつ考え方が変化していった。たとえば、当たり前のように結婚し子育てをし、「普通の幸せ」を手にしていく友人たちや、それが当然で喜ばれるべきものであるとする社会規範に、自分自身がフィットしていないと感じるようになった。また、重度身体障害者と4年ほど生活を共にする中で、世の中がどれだけ健常者の都合の良いようにできているのか、障害者への差別や偏見がいかに多いかを目の当たりにした。さらに、複数の身近な人たちの、「生きづらさ」を抱えた末の自死を含めた死に出会った。「どうしてこの人が死ななければならなかったのか」「どうして世の中はこんなにも生きづらいのか」。やり場のない憤りを覚えながら、なすすべはなかった。人の心の叫びや痛みに触れ、自分の心の感度をどれだけ下げても耐え切れない出来事が積み重なっていった。

答えのない憤りは自分に向かっていくことになる。自分が多くの社会問題に無関心であること自体が大きな問題なのだと。私が「普通」を追い求め、「普通」になれないことに落胆することそのものが私も含めた多くの人の生きづらさになっているのだと。そして、自分が自分の幸せに立ち返り、自分に誠実に生き、社会に対しても“嘘”をつかず誠実でありたいと思うようになっていった。

○ある在日朝鮮人との出会い

そんな中で、5年ほど前にある人と出会った。自己紹介をしたとき、そ

の人は本名である朝鮮名と「在日朝鮮人である」ということを話した。在日朝鮮人であることをオープンにして生きる人がいるのだと驚いた。この機会を逃すと自分の出自について一生肯定することはできないかもしれない。そう思い、初対面の人に、初めて自分のルーツを“告白”した。その後、自分のルーツにしっかりと向き合いたいと思うようになり、その人に「ルーツの扉を開きたいから在日朝鮮人について教えてほしい」と打ち明けたところ、「朝鮮人であることにポジティブに向き合えるようになったのであれば、同じ朝鮮人として嬉しく思う」と言われた。「同じ朝鮮人」なんて言われていいのか…。今までの苦しみから解放されたような嬉しさ、朝鮮を卑下してきた申し訳なさ、色々な感情が押し寄せて、むせび泣いた。それからさまざまな本を読み、講演会等に参加するようになった。今まで知らなかった・知らされてこなかったことを知ることになった。日本の学校ではほとんど習うことのなかった日本の植民地支配の加害の歴史。日本で、差別と闘いながら必死に生きてきた在日朝鮮人の歩み。そして、私のような存在が日本にはたくさんいるのだということ、私のような存在をダブルルーツということ、私も在日朝鮮人と名乗っていいのだということ。父の学歴や職歴の不自然さ、家族が隠さなければいけなかった理由を想像するようになり、父に対しての嫌悪感がみるみるなくなっていく。チマチョゴリを着たり、朝鮮の文化や芸術に触れたり、朝鮮料理を作ったり……。ひとつずつ「取り戻していく」ことが嬉しくて、どんどんと突き進んでいった。そんな矢先、2022年5月。ウトロ平和祈念館がオープンし、私は友人たちとオープニングイベントに参加した。イベントでは、在日朝鮮人の団体が民族衣装を身にまとい、民族楽器を打ち鳴らし、華やかに伝統的な踊りである“農^{ノン}樂”をしていた。そして、場に集う多くの人がその輪に加わり、笑顔で参加していた。その光景にめまいがするほど打ちのめされた。友人たちが誘ってくれるものの、足がすくんで動けない。踊っている朝鮮人たちが輝いて見えた。それぞれが長い時間の中で血のにじむような苦悩を味わったからこそ今こうして「ここに在る」。苦しみがあるからこそ勝ち得た幸せや喜びが、ひしひしと伝わってきた。その姿を目の前にして、私は立ち尽くすしかなかった。それに対して私はどうなのか。自

分らしくありたいと自分のルーツの扉を開いたものの、自分を構成する国籍・言葉・文化・名前。どこにも朝鮮を見いだせない。何より国籍が日本である以上、私は限りなく加害側の存在であり朝鮮人にも日本人にもなりきれない中途半端な存在だと思い知らされた。在日朝鮮人が置かれている状況は今も、差別・偏見・不条理に満ちている。こんな社会に対して私は何ができるのか。ただ朝鮮名で呼んでもらえて喜んでいるだけではいけないと痛感した。

○在日朝鮮人として眼差されることを選ぶ

生き方について悩んでいると、ある友人が「朝鮮人とはだれか」という私の問いに対して「朝鮮人として眼差されることを引き受ける人」と答えてくれた。「たとえ不利な立場においやられても、虐げられても、蔑まれても、むしろだからこそ朝鮮人を名乗るような態度をとること、そんな朝鮮を大事にしたい」と。その答えに私は救われるとともに深く共感した。国籍も文化も言葉も朝鮮ではないと言われようと、私は「わたしの朝鮮」を大切にしていきたいと強く思った。

「朝鮮人であること」を知って「汚らわしい」と思った弱い自分。この醜く弱い自分を受け入れ、この深い罪を含めた自分を構成するもの全てを肯定できる生き方をしていきたい。そう思い、私自身が「朝鮮人として眼差されることを引き受ける人」になるには……と考えた末、名前だと思った。そして、職場の通称申請を利用して、父の通称名であった木村から本名の金に名乗りを変えた。差別や生きづらさに対して無関心を装い無視していた自分から、差別に対峙し、差別をなくすために動く主体となるために、在日朝鮮人として眼差されることを選んだのだ。それから、可能な限りあらゆる場での姓を金に変え、「金愛」として暮らしている。

○「アライ」という存在の暴力性

「金」として民族的なマイノリティ性のある一人として生きることを選択した途端、世界はがらりと変わった。“多様性の実現”という課題は、マイノリティがその場にいるということだけで解決したかのように扱わ

れ、実際にそのマイノリティが直面する問題の解消は、マジョリティの抱える課題よりも常に後回しにされてしまう。マイノリティが問題解決のために声をあげると、「わがまま」「面倒くさい」「気にしすぎ」「こっちゃだってしんどいんだ」と、その声はかき消される。さらには、社会の規範を乱し、混乱に陥れる存在かのように扱われ、忌避されることさえある。

金愛として生きることを選択した私に投げかけられた数々の言葉——「何人でも関係ない」「多様性の時代だね」「かわいそう」「ほとんど日本人みたいなものじゃない」「自己主張の強い民族性」「キムチ作って送ってこい」「私のザイニチの友人は〇〇って言ってたよ」「こだわりすぎ、考えすぎ」「不愉快」「和を乱して迷惑」「被害妄想」「感謝が足りない」「悲劇のヒロインにでもなったつもりか」「こうなってほしかったんでしょ」「こっちは何も言えなくなる」「傷つけたくないからしばらく関わりたくない」……。しかも、その多くが、私をなんとか理解しようとし、助けようとしてくれた「アライ」からの言葉だった。

アイデンティティに向き合う過程で葛藤する私を心配し、励まし、応援しようとしてくれた。そして、“正しい”方向に導こうとした。けれど、そんな「アライ」たちの言葉だからこそ、私は深く傷ついた。私を理解し、応援しようとする人たちの言葉で、どうしてこんなに傷つくのか。理解して説明しようとしてくれた言葉が、なぜこんなにも実際の私と乖離しているのか。これほど寄り添おうとしてくれているのに、なぜ逆に私はどんどん孤立していくのか。そもそも、なぜ私の在り方や生き方をその人の指標で判断され、許可されなければならないのだろうか——。その理由をずっと言葉にできなかった。安全な場所から私を見つめ、投げかけてくる視線や言葉に、少しずつ狂わされていくようだった。専門機関に助けを求めて、言葉を尽くして生きづらさや不調を切実に訴えても、相手にはなかなか伝わらなかった。精神科医は「脳の病気」と説明し、睡眠剤や向精神薬を処方した。カウンセラーは「認知の歪み」とし、ものの見方を変えるしかない、今あなたが見ている世界は、“あなたが見ようとする世界”なのだと、私の“歪み”を治そうとした。私がこうなっているのは私自身がおかしいからだ、と、どんどん自分を見失っていくようだった。私の不調は自身の「脳

の病気」でも「認知の歪み」でもない。歪んでいるのは私ではなく社会ではないのか——。そう訴えても、同情はされても、言葉としては届かなかった。

同時に、自分もまた誰かを無意識に、そして鈍感に傷つけ得る存在であることを痛感した。「LGBTQ の人」とひとくくりで眼差し、同性愛者もトランスジェンダーもクィアもその人の自由だと思いながら、そのことで生活が脅かされ命の危険にさえさらされる現状に見て見ぬふりをする。無自覚に自分もセクシュアルマイノリティ当事者を抑圧し、人権や尊厳を奪う一人であることに気づいた。一方、セクシュアルマイノリティについての本を読んだり研修に参加したりするなかで、「境界は曖昧だ」と感じる事が多々あった。『女の子』の服装を極端に嫌がり、「僕」と呼ばれることを嬉しく感じた子ども時代の自分。女子校でずっと女性の先輩に恋愛感情を抱いていた中高時代の自分。しかし社会に適応するなかで自ずと決められていった、女性でシスヘテな今の自分。そんな自分を思い起こした時、「性はグラデーション」の意味を自分事として理解できた。そして、この社会がどれだけ一部のマジョリティの都合よくさまざまな規範や制度を作り上げ、そうではない人を排除し、抑圧しているかに思い至った。

私にとって忘れられない、忘れてはならない出来事がある。大勢の聴衆がいる緊張した場で、ある個人がジェンダーを一方的に特定される瞬間に居合わせた。問題のある発言だと即座に理解したが、身体が凍り付き、その場で声を上げられず、ただ傍観してしまった。「見て見ぬふりをした」という事実は、時間が経つほどに重くのしかかった。私の沈黙は、差別構造に加担する行為そのものだった。自身のマイノリティ性によって傷ついた経験をしてきたにもかかわらず、「その場の空気」や「安全な立場」を優先し、声を上げない選択をしてしまったこと。あのときの私は、まさに“安全な場所から眺める「アライ」であり、自分が一番なりたくない自分だった。自身のマジョリティ性・加害性を痛感するとともに、もうこんな自分や、こんな社会はまっぴらだと改めて感じた。

セクシュアルマイノリティ当事者にとっての「アライ」的なものになりたいと思いながらも、抑圧者でもある自分が「アライ」と言うことへの嫌

悪感、自分にも存在するかもしれないクィア性を無視して、あえて「アライ」側でいることのもどかしさ、そして「アライ」によって傷ついた経験のある自分が、セクシュアルマイノリティ当事者の「アライ」にはなりたくないというこだわりのようなものを感じていた。

○“Accomplices not Allies”と「アライ」の回復

そんななかで“Accomplices not Allies”という概念に出会った。「安全な場所から応援する人」ではなく、「同じリスクの中に身を置き、ともに社会を変えようとする存在」。その姿勢こそ、私が心から求めていた関わりだったのだと感じた。

私はあなたに対して「安全な場所にいるアライ」にはなりたくない。あなたを“正しく”理解することなど到底できないし、あなたを支援・支持する権限もない。だからといって、傷つけることを恐れて距離を置きたいとも思わない。あなたを「常に助けを求めているかわいそうな人」とは思わない。自分の特権や加害性を常に問い直し、自分の痛みにも、あなたの痛みにも敏感であり続けたい。私を大切に生きることと、あなたがあなたを大切に生きるとは共存できると信じている。あなたが社会から排除されることを、私は絶対に許さない。あなたがあなたらしく生きるために、わたしがわたらしく生きるために、ともにリスクを負い、ともに揺れながら歩きたい。求める世界のためなら、信仰も生き方も何度でも変えていきたい。あなたやわたしが抑圧され、排除され、罪のように扱われる現実が続く限り、私は「アライ」なんてものではなく「共犯者」でありたい。

「アライ」として安全な場所にとどまろうとする自分と決別し、交差する差別構造の中で、加害者としても被害者としても存在する自分を引き受けたい。そのうえで、虐げられず虐げない、踏みつけられず踏みつけない、傷つけられず傷つけない——そのように、わたしがわたらしく、あなたがあなたらしく生きられる世の中をつくりたい。それこそが、私が自分自身の中にもある差別から解放される道であり、守られるべき一人ひとりの尊厳であると強く思う。誰もが自分らしく生きる社会とは、誰一人として排除されない社会のことだ。そして、マイノリティがその翼を折られる

ことなく自由に生き、自分自身の物語を語り、自分のために声をあげられることだ。私たちが目指すべき社会は、まさにそういう社会だと強く信じている。そんな社会を実現するために、私たちを分断し、だれかを排除させるあらゆる規範——レイシズム・ホモフォビア・トランスフォビア・ミソジニー・家父長制・優生思想・能力主義——と向き合いたい。そして、自分自身も気づかぬうちに内面化してしまっていた「誰かを踏みつける力」に目を向け、抵抗していきたい。

「アライ」に対してここまで批判的に書いてきたが、独りよがりで欺瞞に満ちた「アライ」ではなく、本来のアライ、アライシップとは何かを改めて考え、自分の中の「アライ」を回復していきたい。

○マジョリティ当事者として

最後に、どうしても伝えたいことがある。変わらなければならないのは、常にマジョリティであるということだ。社会構造は、踏んでいる側がその足をどけない限り、決して変わらない。まず私たちは、この事実を自覚しなければならない。マイノリティが直面する問題は、問題を生み出し維持している側＝マジョリティの問題であるということ。社会の仕組みが変わり、格差が是正され、マイノリティが自分らしく生きられるようになることは、マジョリティの権利が侵害されるものではないということ。その理解を持ったうえで、マジョリティ自らが差別をなくすために行動する必要がある。在日朝鮮人への処遇を「在日特権」と言い、レインボーウィークを「セクシュアルマイノリティ当事者ばかりが優遇されている」と批判する前に、まずは圧倒的に非対称な社会構造に目を向け、自分自身の特権や加害性を振り返ってほしい。マジョリティでさえ感じる「生きづらさ」の根源は何なのか。それを安易にマイノリティのせいにせず、じっくり考えてほしい。

それにも関わらず、マジョリティはしばしば、問題解決をマイノリティにゆだねようとする。過度に頼り、何でも説明させ、逆にその言葉を奪い、代弁しようとすることもある。マイノリティ個人の「傷つき」を指標にし、好き勝手に判断しようとする。問題の本質が何であるか見ようともせず、

「かわいそうな人」と決めつけてかかる。勝手な解釈で『助ける』ことを自己肯定の足しにしたり、社会的評価につなげようとアピールする。そして、自分の加害性を棚に上げてマイノリティの言葉を理屈なしでありがたがったり、逆に怒ったり、さらには、こともあろうか、まるで自分もその一人であるかのように振る舞おうとさえする。

当然のことながら、“多様性の実現”という課題は、マイノリティがその場にいるだけで解決するものではない。それにもかかわらず、これまでもずっと、すぐ隣に存在してきたはずのマイノリティをあえて可視化することによって多様性の実現が達成されたと安堵してしまっていないだろうか。そして、マイノリティが日常的に直面している差別や排除の問題を、マジョリティ自身の課題よりも後回しにしていないだろうか。あるいは、マイノリティを『助ける』ことに『気持ちよさ』を感じてはいないだろうか。もしそうであるならば、そのようにマジョリティにとって都合の良い「アライ」は、果たして誰のためのものなのか。そんな「アライ」になっていないか、本来のアライシップとは何かを、私たちは常に自分自身に問い直していく必要がある。そして、私も含めたマジョリティが、マジョリティであるという自らの立ち位置から社会構造に向き合い、行動することを心から願う。「アライ」は私のアイデンティティではない。固定的に自認するものでも、名乗るものでもなく、周囲から名指されるものでもない。それぞれが持つあらゆる当事者性をたよりに、この社会構造に向き合い、差別に抗うための実践そのものなのだと思う。

今日も関西学院にはたくさんの人が集う。職員として、マイノリティ性もマジョリティ性もある一人として、関西学院に集うすべての人を尊び、希望を失わずに歩み続けていきたい。一点の曇りなく、出身校であり職場でもあるこの学院が好きなのだと言えるようになるために励みたい。この学院が真の意味でインクルーシブな環境となるように、あなたがあなたで、わたしがわたしでいられるように、私は私にできることを、たゆまず、ひるまず、続けていきたい。